
あの部屋は

真島 夏佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの部屋は

【著者名】

Z9532P

【作者名】

真島 夏佳

【あらすじ】

これは中2の夏佳と中1のともきとの「男の恋愛物語（？）」です。

最後の展開がとっても意外です。

今日もかわらず中学校の昼休み皆がギャーギャー騒ぎながら遊んでいる。

わたしはなんだかあのテンションについていけそうにない。女子はもつと大人しくガールズトークでもしていればいいのに。

そう思うわたしは今日も校舎内をブラブラしている。

そしてわたしは気が付くと屋上の入り口の扉の前に立っていた。ふと横を見ると一つの扉がある。

そういうえばここ初めて来たな・・・。

こんなところに何の部屋だろ?

少しどキドキしながら扉を開けるとそこには・・・掃除道具、机、棚、椅子、窓、そらから・・・男の子・・・

えつ?

男の子? いつたい誰?

わたしは部屋に入りその男の子を一直線に見つめながら近づいていった。

男の子の前に立った。

その子は何もしゃべらずにわたしを見ている。

わたしはその子に話し掛けた。

「あの~・・・えつと・・・なん年生ですか?」

「えつ?・・・1年だけど」

その子はわたしより少し背が高く自然な茶髪のしつかりとした顔立ちの子だった。

「1年生か～、あたしは2年生。 2・Aの真島 夏佳！」

「そうなんだ～俺は1・Aの山田 ともわ～」

「よひしへ～」

「よひしへ～」

「もう君が入学してきて1年もたつのに初めてみたよ～」

「もうだとと思つよ。俺あんまり学校来てないし・・・」

「そう・・なんだ・・・」

「ねえ、なんでこんなとこにいるの？ なんか薄暗いし寒くない？ 真冬なのに暖房もないし・・・まあこんな部屋にあるわけないか、教室じゃないしね」

「そうだね。でもさ、なんか落ち着かない？ 屋上もすぐそこにあるけどせ、カップルばっかじゃん」

「確かに～！ あたしも行けりつと思つたけどなんかね・・・」

「もうもう一笑」

この子笑うんだ
なんか可愛い

キーンゴーンカーンゴーン

「あつー・もひ休み時間終わりじゃん。

教室帰るひ。

「うん」

「あのわ・・・名前、ともきだつたよね?」

「うそ

「じゃあ、ともきって呼んでいい?」

「ここの。じやあ夏佳だよね? 一応先輩だから・・・夏佳先輩!」
「ひひ? こいつ?」

「いいよ。じやあ決定ね!」

「あつー俺、教室こいつだから。」

「わつか。じやあね

「じやあね。夏佳先輩!」

そう言つて無邪気な笑顔でわたしに手を振りながら、ともきはAの教室に入つていった。

わたしは5時間目の授業中にともきの事を考えていた。

そして気になることが一つあった、それはともきの言つてた「あんまり学校に来てないし・・・」という一言だ。いつたいその理由はなんなのか・・・

ともきに聞いていいか悩んだ・・・

あまり知られたくないことだから自分からは言わなかつたのかも

しない・・・

でも、知りたい。

もう少しともきと仲良くなつたら聞いてみよう。

次の日

今日も午前の授業を終えてあの部屋に行つた今日もそこには、ともきがいた。

「ともきー」

「あー！夏佳先輩。今日も来てくれるなんて思つてなかつた。俺は毎日いるけどね放課後もたまに」

「わうなんだ」とともきは皆と校庭で遊んだりしないの？

「うう・・・遊びたくても無理だしね・・・」

「えつ・・・？」

「あー・・・それよつとー夏佳先輩は皆と遊ばないの？」

「うーん。なんか皆とトントンショーンが合わなくて・・・」

「そつかあ。まあ無理して一緒にいる必要ないしね」

「だよね～」

「あつ・・・あのわ・・・一つ聞きたい」とあるんだけど・・・

「何?」

「ともしきがあんまり学校来れなかつたり皆と外で遊べない理由はな
に・・・?」

「・・・・・・・」

「「めん。いきなり」んな事聞いて・・・。べつに書いたくなかつ
たらいこよ。」「めんね」

「べつにいじよ。聞きたい?」

「あつ。うそ・・・聞きたい・・・」

「あのね。俺・・・・・持病があつてね・・・心臓病つていうんだ
けど・・・名前ぐらいは聞いた事あるよね?」

「うん・・・」

「生まれつきなんだけどさ。だから激しい運動とかは禁止でさ・・・
。病院行くことも多いしたまに発作とか起こして入院とかしてたん
だ・・・だからあんまり学校来れないし、皆と同じようにも遊べ
ない」

「そうだったんだ・・・。なにも知らずにこんな事聞こちやつて」

めんね」

「ああ。大丈夫だよ。気にしないで。さあー、仮を取り直して楽しく
行こうよー。お菓子あるからわ」

「本当だーーーあたしこれ食べるーーー」

「じゃあ俺はこれね」

こんな風にして毎日のよいつとももと話したりしていた。

「あのわ。俺、明日から2日間は検査で病院行かなきゃいけなくて
学校休むから」こにこれない」

「そりなんだ。。。わかつたー寂しいけど我慢するね」

「うん。」めんね。ありがと」

「んじゃ教室に戻らうかー」

「そうだね」

またいつもの場所でお別れだ。

「じゃあねー」

「バイバイ」

あ

明日から1日間休みは何しようつかな

たまには校庭に行って遊ぼうかな

次の日

午前中の授業は眠くてダメだ
つてゆうかともきがいなんてつまらなすぎる。

昼休み

あああああ

ともきいないんだ

カッフルばっかりだけど屋上行ってみよー。

屋上

「わあー

この屋上ってこんなに眺めよかつたんだー
ともきにも見せてあげたいな
学校来たら連れて来なきや！！

2日後

今日はともきが学校に来る日だー！！

楽しみ〜。

もう早く屋上の眺めを見せたくて授業にならなかつた。

昼休み

早くあの部屋に行ってともきに会いたくて階段を駆け上がった
そして、あの部屋に扉を開けるとそこには普段とかわらず、とも
きがいた

「おひー！久しぶり」

「久しぶり。あの部屋上出ない？おひー！く眺めいいんだよ！」

「いいけど・・・あそこカップルしかいなくて気がまずくない？」

「何も知らない人から見たらおたし達カップルにしか見えないよ！」

「！」

あたし・・・何言つてんだろう・・・

自分で言いながらなぜか恥ずかしかった
でもともきは笑顔で言つてくれた

「やうだね。行こつかあ！」

「うんー。」

屋上

「わあー。すげー。こんな学校からこんなにいい景色が見えるんだ

ー

「でしょー。キレイだよね」

「天気いいから富士山見えるね」

「うん。最高だ」

「あつ。もうそろなか入らない? 寒くなつちやつて」

「ああー。いよ。あの部屋行こいつ」

「うさ」

部屋

「なんかさーの部屋つて落ち着くよねー。べつにこの部屋キレイで
もないし薄暗いし」

「だよねー。でも、なんか夏佳先輩が来るよつになつてからーの部
屋なんか明るくなつた」

「そうかなーわかんない」

「絶対そつだよーー」

「そつかあ。ありがとつ」

「ううん。俺もさ、実は夏佳先輩が来るまで毎日つまんなくてつま
んなくてしかたなかった、夏佳先輩といふ時が一番幸せだよ」

「ありがとう。なんか恥ずかしいじゃん」

つてゆうか、ともきと顔近づ…。

なぜか目を見るのが恥ずかしくて下を向いてしまった
でも、ともきの顔がどんどん近くなつてくるのがわかった
顔を上げてみた

ともきの顔が目の前にあつた

その瞬間、唇に何か暖かいものが触れた

えっ？

これってキスだ…。

ともきの唇はまだわたしの唇に触れている
軽く触れているだけなのになぜか心に重みを感じた
そして、ともきは唇を離しわたしの顔を見た
きっとわたしの顔は真っ赤だろう
すると、ともきが軽く微笑んだ
わたしは気づいた

ともきに恋してる…。

そこでチャイムが鳴りわたし達はいつものようにそれぞれの教室に
帰った

それからも変わらず毎日ともきと、あの部屋で会ったそして一緒に

話してキスもした

そして、ともきが言つてくれた

「俺・・・夏佳先輩が好きだよ」

「あたしもだよ。キスまでして好きじゃないつて事はないでしょ」

「だよね。じゃあ俺たち付き合つへー。」

「うさ。いいよ」

「うじてわたしたちは付き合つへーとこなつた

そんなんある日、今日は友達と遊ぶことになり皆で帰つた
歩いている途中に忘れ物に気が付いた皆さんに「先に帰つてて」と言つて
教室に戻つた
忘れ物を取つてからわたしはあの部屋に行つた

放課後もこるつていつてたし

わたしはそのままあの部屋に向かつた
扉を開けるとそこには、ともきがいた
でも様子がおかしい・・・ともきが横たわっている
近づいてみた
すると、ともきは田をつぶつて寝てるようだった

「ともや、ともき」「あわせ」

呼んでも起きない・・・

なんで・・・?

わたしは階段を駆け下りて先生を呼んだ
すると何人の先生が来て

驚いていた

ひろきの横にはくしゃくしゃの紙に読めるか読めないかの字で二つ
書いてあつた

「夏佳先輩 ありがとう

ともき」

わたしは泣き崩れた

先生が言うには意識がないらしい

救急車を呼んだ、だがなかなか来ない

騒ぎを聞いて駆けつけた野次馬の生徒たちが入ってくるのを教師が
必死にとめていた

ともきの手を触るととても冷たく人間の手とは思えなかつた・・・

わたしは手紙とともに手を握り締めていた

もうどうしていいかわからなかつた

しばらくして救急隊が部屋に入ってきた

わたしは部屋の隅に連れてかれ、ともきと救急隊を見ていた

そして救急隊がこう言った

「もうしわけありませんが死後からずいぶん時間がたつてしまつて
いて・・・残念ですが」

そう言って救急隊が時間を言つていた

もう周りの声など聞こえなかつた

死んだ理由は心臓発作らしい・・・

ともきの手を握つた

その手を離したくなかった

そして、この部屋でともきと話したことやお菓子を食べたことや座席上で景色を眺めたりキスしたことを思い出した

思い出せば思い出すほど息ができないほど苦しくて悲しくて自分がおかしくなりそうだった

いつのことこのまま自分も死んでしまおうかと思つた
わたしが泣き崩れてると先生がわたしを包み込むように抱きしめてくれた

先生の体は温かくて少し安心できた

でも、涙はいつまでも止まることはなかった

そして、ともきの死体はこの部屋から運び出す時
わたしは苦しくて息ができなかつた
もう自分がコントロールできなかつた

最後にわたしは、ともきの手をギュッと握つた
そして、ともきはこの部屋から運び出された
わたしの手にはともきの冷たい手の感覚と手紙が残つた
すると辺りが真っ暗になり何も見えなくなつた
そして声が聞こえた

「夏佳先輩、俺だよ、ともき。」

え？

「ともき？」

「いいだよ。俺はいつも夏佳先輩のそばにいるよ。だから泣かないで

「そう言われても泣かないなんて無理だよ」

「俺も、せっかく夏佳先輩と付き合いつことができたから一緒にいろんなどに行きたかったなーでも無理みたいだね。今まで本当にありがとうございました。俺は幸せでした。さよなら。またいつか会おうね」

「まつて、ともき。あたしも幸せだった。ありがとう。いつか会おう。待ってるね」

わたしが死ぬ気で涙をこらえて笑顔で言った

目が覚めるとそこは保健室だった
職員室が騒がしきりと、ともきの事だらけ

わたしはもう泣かないことに決めた
ともきがまた会おうって言つてくれたからまたどこかで会えるから
泣かない

少ししてから先生が入ってきた

「真島さん大丈夫?」

「はい。大丈夫です。もう泣かないって決めたんでーきつとまた会えるから

「やつ。やつとやつね」

するとまた辺りが暗くなつたそして向こうの方から声が聞こえてくる

「夏佳～夏佳～早く起きなさ～よ～…遅刻するわよ～」

んん・・・・

あれ・・・・?

夢・・??

でも手には、ともきの手の感触に唇の感触も残つてゐ
手紙を握っていた感じも残つてゐ

枕も少し濡れてる

泣いてたのかな・・・?

でも、あたしはまだ中1だし

「ほらー 今日から中2でしょー 早く起きなさ～」

そつかあ 今日から2年生か～

もしかしたら、ともきに似た子いるかな～?
いたらきっとそれはともきだ!
絶対に!

昼休みにあの部屋いつてみよつー

「せり起きてー」

「はーー」

そして朝じはんを食べて身支度して
今から、ともきに会いに行く！

「こつできまーす」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9532p/>

あの部屋は

2011年1月9日07時46分発行